学園黙示録 ～大切な君を～

神威玲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園黙示録　～大切な君を～

【Nコード】
N9754S

【作者名】
神威玲夜

【あらすじ】
【奴ら】に噛まれ【奴ら】になってしまった君。
できるならもう一度君と笑い合いたかった。
せめて・・・最後は俺の手で・・・

（前書き）

連載が終らずに短編に逃げました
まだまだな文ですがお楽しみください

俺達は【奴ら】だらけになった学校から
学校のバスで逃げようとしていた。

「走れ！もう少しでバスだ！」

俺はそう叫び、迫り来る【奴ら】から
バスに逃げる仲間達を守るために
バットを手に【奴ら】に向かって駆けた。

「うぉおおおおお！！！」

グシャ！バキャ！ドゴッ！

俺は何匹かの【奴ら】を倒したが
それでも【奴ら】の数は増えて行くばかり

「くそっ！数が多すぎる！」

バスはまだ動けないのか、発進しようとはしない。
もう少し時間を稼ぐために、俺はさらに叫んだ

「こっちだ！こっちに来い！」

俺はそう叫ぶと、
バスとは違う方向に向けて走り出し
【奴ら】を煽った。
それに釣られほとんどの【奴ら】は

俺に向かって歩き出した。

「これで時間が稼げるはずだ！」

そうして俺は校庭を逃げ回り
バスの場所へ走った。
その間に準備ができたのであろう
バスの中から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「すぐに行く、待っててくれ！」

俺はそう言うと走るスピードを上げた。
そしてバスに辿り着き乗ろうとした時
バスの陰から【奴ら】と化した
一人の女生徒が俺に向かってきた

「まだ残っていたか！」

倒そうとバットを振りかざした時
その女生徒の顔を見た俺は
バットを振り下ろす事ができなかった。

「嘘・・・だろ・・・」

その女生徒は俺の大切な、とても大切な
『児島　紀衣』その人だった、しかし
すでに【奴ら】と化し俺を襲おうとしていた。

「逃げたと思っていたのに、何で・・・何でお前が！」

”紀衣”は俺を襲おうと手を伸ばして来た
どうしようもなくなった俺は
バットで足を狙い”紀衣”を転ばした
バスからは俺は急かす声が聞こえてきた
しかし俺はバスに向けてこう叫んだ。

「先に行ってくれ、俺は行けない！」

何故と言う声が聞こえたが
俺は乱暴にバスのドアを閉めると
バスに背を向け、”紀衣”の所へ向かった
わかってくれた奴がいたのだろうか
バスは急発進して、そこに俺一人が残された。

「お前のそんな姿は見たくなかったな・・・」

”紀衣”はすでに立ち上がり
俺に向けて歩き出していた。
俺はバットを握りなおしながら
紀衣との思い出を思い出していた。

――――――あの時は楽しかった。

俺の隣にはいつも紀衣がいた

朝は一緒に学校に行った

昼休みには一緒に弁当を食べた

夕方は一緒に帰った
その時の紀衣はいつも笑っていた
そんな紀衣の笑顔が好きだった
可愛いと言うとすぐに赤くなった
そんな紀衣の顔が好きだった
一緒にいる時、俺は紀衣の髪を撫でて
そうすると、紀衣も俺の髪を撫でてきて
それがくすぐったくて、しかし心地よくて。
そんな一時がとても幸せに思えた、そんな思い出。
すでに”紀衣”は覚えていないだろう
俺を好きだった事も覚えていないだろう。
俺はこれ以上、今の紀衣の姿を見たくなかった。
――――――せめて・・・最後は俺の手で・・・
「紀衣・・・大好きだったよ・・・
さよなら・・・俺の愛しい人・・・」
俺は”紀衣”に向けて最後になるだろう
贈り物として、バットを振り下ろした。

グシャ・・・！

頭蓋骨が砕ける音と共に、紀衣は崩れ落ち、倒れた。
俺は側に咲いていた花を紀衣の死体に置くと
バットを持ち立ち上がり、集まってきていた
【奴ら】に向けてこう叫んだ。

「もう何も気にしないでいい・・・
死ぬならせめてお前らを道連れにしてやる！」

俺は【奴ら】に向けて走り出し
バットを振り上げ、暴れまわった。
そうして集まってきていた【奴ら】の
半数を殺した所で体力が尽いてしまった

「はぁ・・・はぁ・・・ここまでやれたらもう本望だよな・・・」

俺はそう言うとバットを投げ出し、座り込んだ。
そして【奴ら】が襲い掛かってくるのを見ながら

俺は先に殺した紀衣の事を考えていた・・・

（もうすぐでお前の所に行けそうだよ・・・紀衣・・・）

――――――そうして俺の意識は

――――――【奴ら】の凶牙によって

――――――二度と目覚める事のない

――――――眠りに落とされていった・・・

（後書き）

初めて短編を書いてみた　終わりが見えなくて苦労しました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9754s/

学園黙示録 ～大切な君を～

2011年10月9日01時06分発行